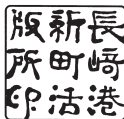




新街私塾



長崎活版製造会社之印



長崎港新町活版所印



本木家家紋



大阪活版製造所マーク



本木昌造による家紋
(大阪活版製造所マーク)



平野活版所の初期のマーク



東京築地活版製造所のマーク



本木昌造の認め印

例言

わが国の印刷事業はとく奈良平安朝のむかしに寺院において創始され、久しきにわたって僧侶の手中にあつた。江戸期にはいつて勅版がでて、官版および藩版がおこり、ついで庶民のあいだにも印刷事業をはじめめるものがあらわれた。

寛文(一六六一―一七二)以後木版印刷術がおおいに発達して、正徳享保の時代(一七一―一三五)から木版印刷術は全国に普及をみたがそれは欧米諸国の近代活字版印刷術にくらべるときわめて稚拙なものだった。

幕末の開国とともに洋学が勃興して印刷術の改善にせまられた。

そのときにあたつて近代活字鑄造と近代印刷術の基礎をひらき、よく国民にその恩恵をひろめたものが本木昌造翁だった。

筆者はすでに『印刷文明史』を著わして本木昌造翁のことをしるしたがいささか冗長にながれまたいささかの訛伝の指摘もうけた。

さらには畏友にして活字界の雄たりし、青山進行堂活版製造所青山容三（督太郎）氏、森川龍文堂森川健市氏の両氏から活字の大小の格（ボディサイズ）のことのあらたな教授もえた。

さらに筆者はすぐる太平洋戦争においておおくの蔵書を戦禍にうしなつた。また青山進行堂活版製造所、森川龍文堂の両社はその活字の父型と母型のおおくをうしなつている。

このときにあたり、ふたたび日本の近代文明に先駆して開化の指

導者としておおきな役割を演じた本木昌造翁の功績を顕彰してそれになまぶところは大きなものがあると信ずるにいたつた。

本木昌造翁はひとり近代印刷術の始祖にとどまらず、むしろ研究者であり教育者でもあつた。本木昌造翁の設立にかかる諸施設とはむしろ「まなびの門」でもあつたのである。

そうした本木昌造翁のあらたな側面を中枢に本書をしるした。

昭和二四年一〇月二〇日

GREAT-PRIMER, No. 16.

Quousque tandem abutere, Catilina,
patientia nostra? quamdiu nos etiam
furor iste tuus eludet? quem ad finem
sese effrenata jactabit audacia? nihilne
te nocturnum praesidium palatii,
nihil urbis vigiliae, nihil timor populi,
nihil consensus honorum omnium, ni-

ABCDEFGHIJKLMNQPQRSTU

§ 1234567890 £ 1 1/2 1 1/2 1 1/2 1 1/2

Quousque tandem abutere, CATILIN

DOUBLE SMALL-PRIMA, No. 16.

Quousque tandem abutere, Catilina,
patientia nostra? quamdiu nos etiam
furor iste tuus eludet? quem ad finem
sese effrenata jactabit audacia? nihilne
te nocturnum praesidium palatii, nihil

ABCDEFGHIJKLMNQP

§ 1234567890 £

DOUBLE ENGLISH, No. 16.

Quousque tandem abutere, Catilina,
patientia nostra? quamdiu nos etiam
furor iste tuus eludet? quem ad finem
sese effrenata jactabit audacia?
nihilne te nocturnum praesidium palatii,
nihil urbis vigiliae, nihil timor populi,
nihil con-

ABCDEFGHIJKLMNQPQ 457890

DOUBLE GREAT-PRIMER, No. 16.

Quousque tandem abutere, Catilina,
patientia nostra? quamdiu nos etiam
furor iste tuus eludet? quem ad finem
sese effrenata jactabit audacia? nihilne

ABCDEFGHIJKLMNO 1878

ブルー系活字鑄造所のモダンスタイル・ローマン体「STYLE 16」のグレイト・
プリマー、ダブル・グレイト・プリマーなどの書体は本木昌造の初期崎陽活字
の欧文書体の表情にとてもよく似ている。陽光堂文庫蔵。

たとえば英国にはロンドン活字、エジンバラ活字などがあり、米国にはポストン活字、ニュー
ヨーク活字があった。ニューヨーク活字は、ニュー YORK 市およびその近郊にある活版業者は共通に
ニューヨーク活字を使用していたが、ポストン活字とは活字格の大小高低の標準がことなるために
もちいることができなかった。

本木昌造は優秀な活字を得るために活字の標準化に重点を置いた。本木昌造の素志は従来の刊
業者のように自己の出版物にのみ使用するのではなくて、ひろくこれを天下に普及して活版印刷術
を文明の利器たらしめることが目的だったから、全国共通の活字をつくることをこころざした。

*

英国においてはトーマス・ハンサード (Thomas C. Hansard) が一八二五年に『Typographia』
をあらわして活字の標準化を提唱して、一フィートにたいする活字の全角の個数の標準をつぎのよ
うに定めていた。

ツライイングリシユ	三二個
ツラインスモールバイカ	四一個二分ノ一
グレートプライマー	五一個四分ノ一
ツライインプレビヤ	五六個四分ノ一
イングリシユ	六四個

バイカ	七二個二分ノ一
スモールバイカ	八三個
ロングプライマー	八九個
スモールバイカ	八三個
ボジョイス	一〇二個四分ノ一
プレビヤ	一二二個二分ノ一
ミニオン	一二八個
ノンパレール	一四三個
ベール	一七八個
ダイヤモンド	二〇五個

本木昌造は右の標準をおなじ姓ながら別人で、のちに横浜で『ジャパン・ヘラルド』を創刊した英国の新聞人 A・W・ハンサードにくわしく伝授されていたとされる。本木昌造はともかくガンブルからの伝授によって活字鑄造を創始したが、こうした準備もぬかりなくすすめていたのである。こうした次第をへて完成した活字を本木昌造は一般のひとが理解しやすいように活字のおおきを号数によってよぶことにした。

ツーラインイングリシユ	↓	一号
ツーラインスモールバイカ	↓	二号
ツーラインプレビヤ	↓	三号
イングリシユ	↓	四号
スモールバイカ	↓	五号
プレビヤ	↓	六号

と定めた。

このように本木昌造は活字のおおきをまず一号から六号までの六種類を定めたが、のちになって組版の利便性とおおきなサイズの必要性をみとめて、

二号の四倍大	初号
とした。	
さらには	
五号の四分ノ一	七号
六号の四分ノ一	八号

などの活字ができたがガンブルの伝授によって最初に「活版伝習所」において鑄造された活字は二号、四号、六号の三種類だけだった。